あたらしいおかあさん

新

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
あたらしいおかあさん

【Ｎコード】
Ｎ０７３１Ａ

【作者名】
新

【あらすじ】
「新しいお母さん……欲しいか？」お父さんの言葉は、いつまでも僕の心の中に張り付いていた。

『なあ健太。新しいお母さん……欲しいか？』

おとうさんの言葉はいつまでも僕の頭の中に残っていた。

タコのように顔を真っ赤にしていたおとうさんが言ったことなので、しんけんな質問なのかどうかは分からない。おとうさんは酔っぱらうとおかしいことばかり口にするのだ。

でも、あのときのおとうさんの顔はいつもとちがっていたような気がする。顔はこうちょうしていたけど、ひとみは悲しそうに下を向いていた。

ぼくは健太。今年で十歳になる。

おとうさんはサラリーマンをしている。子供のぼくにはどんなことをしているのか分からないけど、きっとえらい仕事をしているのだろう。だって、前に知らないおじさんがぼくのうちにやって来たときに、おとうさんに何度もおじぎをしていたから。おとうさんのことを、「カカリチョー」って呼んでいたしね。

おかあさんはいない。ぼくが小さいときに死んじゃったらしい。

おとうさんの言葉はぼくの頭から離れてくれなかった。フライパンにこびり付いたやっかいな汚れのように――ぼく、ちゃんと料理も作れるんだよ。すごいでしょ――どんなにゴシゴシこすっても落ちてくれないのだ。

『新しいお母さん……欲しいか？』

ぼくはがんばって考えてみた。おとうさんの言葉は、何を意味し

ているんだろう？

まず思ったのは、ぼくのためなのではないか、ということだった。自分とふたりっきりで暮らしているぼくを見て、寂しがっているのではないかとおとうさんは思ったのだろうか。

もしそうであるなら、心配はいらないよ。

寂しくないと言えばうそになっちゃうけど、どうしても欲しいなんて思わない。おとうさんがいてくれれば、ぼくには十分なのだ。

ぼくがすいりするに、寂しいのはおとうさんなのだと思う。

おかあさんがこの世からいなくなってしまったとき、ぼくはまだ何も分からない子供――今も子供だけど――だった。でも、おとうさんはちがう。おかあさんを失ったときの心の痛みは、ぼくにはそうぞうができないほどだったのだと思う。

おとうさんは、ぼくよりも、もっと多くの時間をおかあさんと過ごしてきたのだろう。初めて出会った日のこと。最初のデートのこと。結婚しようと打ち明けた日のこと。ぼくが生まれたときのこと。おとうさんは、今でもはっきり覚えているはずだ。おかあさんの顔と一緒にね。

だから、おとうさんは寂しいんじゃないかってぼくは思う。

おかあさんが死んじゃってから何年も経った。そのあいだに、おとうさんもちがう女の人と出会っただろう。おかあさんのことを好きになったように、その人のことを好きになってもおかしくない。もしもその人とおとうさんが結婚をするなら、その人が、ぼくにとってのあたらしいおかあさんってことになる。

きっと、おとうさんはいろいろと悩んでいるのだろう。ぼくのことを考えて。

ある日、夜中に起きちゃったとき、おとうさんがすごくむずかしい顔でいすに腰掛けているのを見たことがある。

一日かけて考えて、ぼくの気持ちは決まった。

仕事を終わらせて帰ってきたおとうさんに、ぼくは玄関で言った。

「ねえ、おとうさん」
「なんだ？」
背広を脱ぎながらおとうさんは答えた。
「おとうさんの好きにしていいよ」
「えっ？」
「……あたらしいおかあさんのこと」
おとうさんは目をみひらいた。そして、はっと気付いたように、口を「あ」を言うときみたいに動かした。昨日の晩のことを思い出したのだろう。
「おとうさんのことは、きっとぼくにも関係があることなんだと思うよ。でもね、それよりも先に……それはおとうさんの人生のことなんだから。ぼくのことはあまり気にしないで、おとうさんが決めていいよ」
しばらく、おとうさんはあっけに取られたように口をぽかんと開けたままだった。そして、仕事のかばんをどさっと落としてしまった。
「け、健太……」
やっと口にした言葉は、ぼくの名前だった。
「本当にいいのか？」
少しひとみがうるんでいるおとうさんを見て、ぼくはにこっとほ

ほえんだ。
それから、「うん」と首をたてに振る。
「それで、どんな人なの？　あたらしいおかあさんは」
「ここにいるよ」
「へっ？」

ぼくは顔をきょろきょろ回す。
でも、ぼくとおとうさん以外、この家には誰もいない。
「俺……いや、私よ。健太」
ぼくは顔を上げた。
「……え？」
「健太にはまだちゃんと言ってなかったのに……やっぱり分かるのね。親子なのね」
「どういうこと？」
「私はね、小さいときからずっと自分の性に疑問を持っていたの。お母さんに出会ってからも、健太が生まれてからも、ずっとね。健太にはまだ分からないでしょうけど、性同一性障害っていうらしいわ」

おとうさんは胸に手を当てて語り続けた。
「私ね、お母さんがいなくなってから長いあいだ迷っていたのよ。このまま男として生きてゆくべきか、いっそのこと、お母さんの代わりに女になろうかって。でも、今の健太の言葉で踏ん切りがついたわ。私は、女として生きていく」

おとうさんはぼくを抱きしめた。そして、ぼくの顔におとうさんの顔をこすりつけてきた。ぼくのほおに、ヒゲがちくちく当たる。

「……今日から、私が新しいお母さんよ」

うーん……。できることなら、あたらしいおとうさんも欲しいかな……。

あたらしいおかあさんにきつく抱きしめられながら、ぼくはそんなことを思った。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0731a/

あたらしいおかあさん

2010年10月19日02時15分発行